

【書評】

内藤虎次郎著 支那史學史

博洽一世に並ぶものがなかつた故内藤先生、支那學、日本學の諸分野に行くところ可ならざるはない概があつた湖南博士が、その晩年にもつとも精力を集注されたのは支那古代史と支那史學史との二部門であつた。昭和十九年先考の授業弟子のノートを整理して『支那上古史』を弘文堂から出版された市立大阪大學の内藤乾吉氏は、同大學神田喜一郎博士と協力して門下諸氏の講義ノートを校定して支那史學史を同じ書肆から印行された。内藤博士の遺著のなかで最も重要な意義をもつところのこの二書のなかでも、とくに支那史學史は今まで殆んど類書が存在しないという點でもその價值は絶對的である。司馬遷の史記以後、内藤博士のいゆわる史書の出現以後をとつても、すでに二千餘年の長い歴史をもち、二十四史を初めとして無數の大作を生み出した支

那の史學に關して、或いは史記、漢書、史通のやうな個々の作品、或いは劉知幾、章學誠のやうな個人についての部分的研究を除いては、單に書名を列擧した舊態依然たる狭い意味の目録學的なもの、外に、二千餘年の中國史學史全體を通觀する概論が存しないことは遺憾の極みであつた。前述のやうな大部に上る史學の所謂乙部の書を一頭り涉獵することさえ、常人にとつては不可能なことであるから、これらをよく咀嚼して通史を撰述することは、内藤博士のやうな碩學を待つて初めて能くし得ることなのであつた。この上下二千有餘年を包括した六百五十頁の巨篇について、その論旨を、與えられた僅少の頁内に紹介することは不可能であるから、本書の特色、云いかえると、内藤博士が史學史に於てとられた立場を問題として見よう。

第一に擧ぐべきことは、内藤博士は此書に於いて支那史學史を廣い意味の支那目録學の一部門として取扱われているといふことである。この目録學とは前漢

末の劉向、劉歆父子によつて創始された古い傳統を持つ學問である。それは漢の帝室の藏書の分類から出發したという點に於いて、今の圖書館學の圖書分類法に外ならない。しかし、劉氏父子はこの圖書を分類するに當つて、この著述をば儒教的の學問論の體系にもとずいて、六藝諸子、詩賦、兵、術數、方技の六略に分類した(五一頁)。著述の形式よりさらに突込んで、それぞれの學問の方法、對象によつて學問の分類を行つたものである。

そして彼等に於いては、この著述の分類は同時にこれを生んだ學派の分類に一致するものであつた。學問の分類はそこに於いては、平面的な、形式的な、論理的な分類に止まらないで、同時に前漢末の現在書をもつとして、古代から漢代に至る中國の諸思想の歴史的な發生史的な研究を意味していた。それは中國古代諸思想の學統、すなわち思想の系譜を明らかにしようとするものであつた。内藤博士の支那史學史に於いてとられた立場はいうまでもなく、この劉氏父子を典型とす

る廣い意味の目錄學の立場である。中國の歴史學の著述をば、先ずその編纂の體裁を吟味することによつて、著作目的をたずね、その史書の著者のよつて立つ歴史觀を明らかにし、これと類似の史觀をもつ史書と連關して、これらを生んだ學派の發生、發展、衰滅の過程をたどらうとされたものであつた。博士のいわば史書の發生史觀とでもいふべき立場は、第一章の史の起源に始まり、第二章周代に於ける史官の發達、第三章の起録の起源を通じ、第四章の史書の淵源に至る諸章に於いてとくに鮮かに現われ、またそこに於いて王國維の如きと手を組んで、甲骨文金文のような新出の史料を利用して、從來まつたく閑却されていた中國に於ける歴史の起源、その發生の過程を闡明したものとしてみつとも成果を擧げてゐる。

第二に、内藤博士のこの史學は單に中國の史書の學派分け、客觀的な史書の目錄學に止るものではなく、さらに内藤博士の自らの史觀史學の方法と技術とを作

り上げるため、いわば内藤博士の支那通史の前提としての支那史學史論の意味を荷うものである。この支那史學史は言葉をかえて云うと、博士が一生のうちに通讀、熟讀して消化され、所謂内藤史學の發分となつた史書について、その自己の史學に於いてもつ意義と價値とを示されたものに外ならない。その意味に於いてこれは内藤史學の入門あるとともに、支那史學の最高の入門書であると稱しても差しつかえない。いやしくも支那史學に志すものは、この書をひもとくことによつて、自己の専門の領域において、如何なる史學が如何なる價値をもち、如何に讀むべきかを知ることができからである。神田、内藤兩氏の綿密な校定によつて、われわれ後學が聞かんとして聞くを得なかつた故博士の講義を成書として讀むことができることになつたのは、ひとり博士の門弟たちだけでなく、東洋史學界への天來の福音である。兩氏の努力に深甚の感謝の意を表したい。(昭和二十四年五月弘文堂刊A・5版六五六頁 七頁)

圓) — 貝塚茂樹 —

飯塚浩二著 人文地理學說史

飯塚教授の著作『人文地理學說史』は人文地理學が「方法論として如何なる立場をとることが出來、またとらざるを得ないかを、この學問の發達史そのもの、中から確かめようとした」ものであつて常々着實な學說史的反省と方法論的な基礎づけとを忘却し易いわれわれに對しては少からぬ示唆を與えるものである。殊にこの著の明瞭な特色である、個々の地理學說をその各々が成立した時代思潮の中において見ると云う方向は、學史を從來の如き地理發見史、或いは徒らに混亂した羅列的な發達史の束縛から解放するものとして迎えるべきものであろう。

この著は、古代から近代の地理學・フンボルト及びリッターに至るまでを概観した一篇「地理學發達史」から始まり第二篇「地理學史の諸問題」及び第三篇「世界史と地理學」第四篇「ゲオポリテイ